日本YMCA同盟

THE YMCA

The Young Men's Christian Association News

7・8

No.848 2025

2025年7月1日発行（毎月1日発行）
1947年10月27日　第三種郵便物認可
本体価格45円（外税）（送料63円）
発行／公益財団法人 日本YMCA同盟
〒160-0003　東京都新宿区四谷本塩町2番11号
Tel 03-5367-6640　Fax 03-5367-6641
URL：https://www.ymcajapan.org/
発行人／田口 努　編集人／横山 由利亜

東京YMCA野尻学荘

OPINION

「共に生きる」ためのレッスン
―寛容さが失われる時代にYMCAができること―

文教大学人間科学部准教授 **青山 鉄兵**

専門は社会教育、生涯教育。国立青少年教育振興機構　青少年教育研究センター研究員ほか歴任／日本YMCA研究所講師／2016-2024日本YMCA同盟常議員／東京YMCA評議員、野尻学荘副荘長

今から100余年前、戦前のYMCAが行っていた組織キャンプには、自分たちで民主主義的な小社会を作ってみようという、社会実験の場としての側面がありました。日本が軍国主義への歩みを加速させていた時代に、山中湖や野尻湖のキャンプ場で数週間、自分たちで生活ルールを作り、グループワークの手法を用いて、理想的な共同生活を築こうと試みた。当時の組織キャンプは、青年たちの理想を追求するための社会実験でもあったと言えます。

こうした先駆的な実践は、第二次世界大戦後、占領軍によって全国的に普及された青年たちのグループ活動の源流にもなりました。グループワークを用いた民主的な小集団活動は、戦後の価値観の変容に混乱する若者たちにとって、民主主義を直接体験し、新しい社会を作っていくための指針ともなるものでした。

100年以上前のYMCAにおいて、組織キャンプやグループワークが単に青少年の成長のためだけでなく、「新しい社会をつくる」ための営みとしても展開されていたことには、学ぶべき点があると思います。

特に今は、「民主主義の危機」が懸念される時代です。YMCAの組織キャンプやグループ活動には、分断が広がり、寛容さが失われていく現代にこそ、あらためて多様な人たちと共に社会をつくる体験の機会を提供することが求められるではないでしょうか。

子どもたちを取り巻くSNS空間でも「フィルターバブル」などと言われるように、自分が気に入った情報だけが表示され、異なる価値観と接する機会が減っていると言われます。多様な人たちとの共生、一人ひとりの自由や自治を大切にした共存の在り方、そういう体験の場の重要性はますます高まっていると思います。

ただし、グループ活動が民主的なものとは限らないことには注意が必要です。

グループは、時に人を支配し、管理し、自由や多様性を失わせる側面をもっています。特に同調圧力の強い今の中高生に「グループで仲良く過ごしなさい」ということは、かえって生きづらさを増すものになりかねません。実際1980年代頃から若者の集団離れが起き、グループ活動に若者が集まりにくくなっています。今はむしろ「居場所」のように、何もせずに居るだけでいいという、ゆるやかなつながりが好まれます。欧米と違って「個人」が尊重されにくい日本においては、個人と集団の力のバランスをよく考えなければなりません。そのためには個人の自由や主体性をしっかりと尊重し、自治的な集団を目指すことが大事です。

もう一つ重要なポイントは、多様性です。昨今、世界各地で多様性を否定する動きが起きているなか、多様性を認め合えるインクルーシブな社会をどのように作っていくかが課題となっています。とはいえ、多様でインクルーシブな社会とは、トラブルのない社会ではなく、むしろみんなでトラブルを解決し続けられるような社会であるはずです。民主的なグループの経験こそ、こうした多様な人と共に生きていくための基礎となるものだと言えるでしょう。

私は小学生の頃、障がいのある子どもたちとの統合キャンプに参加していました。さまざまな人と共に過ごした経験は、自分とは違う人たちについてリアリティーをもって考える原体験となったと思っています。多様な人と一緒にいるのが当たり前だという感覚を培うこと。一人ひとりを大切にし、問題があれば意見を交わして、異質な他者と共存していくこと。YMCAが伝統的に取り組んできた組織キャンプやグループ活動が、これからも自由で多様な社会の実現に寄与するものになることを願っています。　（聞き手・まとめ　編集部）

ヨーロッパYMCA難民・避難民会議@ベルギー
ウクライナの平和のため 日本から初参加

5月21日～25日、ヨーロッパYMCAの主催で難民・避難民会議がベルギー・ブリュッセルにて開催され、日本から2名が出席しました。ヨーロッパのYMCAは2022年2月のロシアによる軍事侵攻直後から近隣諸国を中心に緊急支援活動を開始、続いて避難民の受け入れと生活支援、募金活動を25カ国で展開、その受益者数は40万人以上にのぼります。日本のYMCAがウクライナから避難者を緊急で受け入れた活動もヨーロッパYMCA、ポーランドやウクライナのYMCAの強力な連携のもと実現したもので、YMCAのグローバルネットワークによる人道支援の実例となりました。

ウクライナ国内にある21カ所のYMCAは、戦禍で一時、活動休止を余儀なくされた拠点もありましたが、若者や子どものメンタルケア、リフレッシュキャンプ等の活動を各地で継続しています。

この度の会議には12カ国が参加し、各国の取り組み事例の共有や、どのように難民・避難民への理解を地域社会に促せるかのワークショップ、EU本部視察・意見交換等が行われました。参加者の中には、ウクライナからスウェーデンやドイツなどEU諸国へ避難し、そこで自らも避難者支援に携わっている方が多く来られていました。印象的だったのは、ユース世代でもあるその避難者の方々が、自分の得意なダンスやアートなどのスキルを活かした活動や、歴史や文化を深く理解する機会を避難先の国々で創り出し、プロフェッショナルとして運営していたことです。それらのプログラムには、ウクライナの避難者だけでなく現地の人たちも参加しており、「支援者–支援対象者」という固定化した立場を溶かすような、しなやかな取り組みでした。一方で、日本のYMCAの実践についても関心を高く持っていただきました。遠いアジアの国で、そもそも難民の受け入れ実績が少なく、日本語の壁や就労環境におけるジェンダーギャップといったヨーロッパとはまた異なる環境におかれた日本のウクライナ避難者の方々が負う痛みに心を寄せていただけたことを、心強く感じました。

EU本部にて総会参加者全員にて

並行して行われたヨーロッパYMCA総会にはロシアやベラルーシからも出席があり、「平和を実現する」という大きな目的のもとにそれぞれの立場で力を尽くす仲間の存在とネットワークの力を体感できました。活動する国の違いも、支援する側／される側という立場の違いも超えて、一緒に平和を創り上げていく働きをこれからもたゆみなく続けたいという思いを改めて強くしました。　日本YMCA同盟　山田 拓路（常議員）・横山 由利亜

戦後80年に ～被爆者の声を聴く

会員インタビュー

千葉県の被爆者団体の事務局を務め、昨年のノーベル平和賞授賞式にも同行された千葉YMCA会員の青木清子さんに、お話をうかがいました。

2024年12月オスロでの受賞パレード。前列左から2人目が青木清子さん、その右隣は夫で千葉YMCA理事の青木一芳さん

（写真撮影：広島YMCA中奥岳生）

私は4歳の時、広島駅から8kmほどの自宅で被爆しました。爆風で家の戸が飛ばされましたが、幸い怪我はありませんでした。しばらくすると、市中から無数の人が逃れてきました。皮膚がむけて垂れ下がり、それを体の前で支えるようにして力なく歩く人たちの姿は、今も目に焼き付いています。母も慌てて、とにかくご飯を炊いておむすびを握り、私がその人たちに差し上げました。

3日後に市中に入り、負傷した従妹を連れて帰りました。背中じゅうに刺さったガラス片を看護師が抜いて、彼女は助かりましたが、兄弟2人は消息不明のままでした。その後、たくさんの知人・友人が原爆症で死にました。10年、20年経ってからも、健康だった人がある日突然に発症して亡くなっていきました。

私自身は、広島大学に進学して学生YMCAに所属。聖書研究会のほか、原爆孤児院の訪問活動などもしました。卒業後は美術教師として小中学校で勤務し、退職後は千葉YMCAで美術教室を主宰。83歳の今も高校生や障がいのある方々に美術を教えています。またワイズメンズクラブの活動にも加わり、国際大会にも参加してきました。

25年前、くも膜下出血で意識不明の数日を過ごしたことを機に、被爆者の会に関わり始めました。今は事務局を預かるとともに、市内の小中学校で被爆証言をしています。教師の経験も活かして、子どもたちに原爆の恐ろしさを伝えたい、そして仲良く暮らす大切さを伝えたいと思って活動しています。

昨年、日本被団協がノーベル平和賞を受賞した際、私もその応援団の一人としてノルウェーの授賞式に同行し、現地で被爆証言もしました。核兵器の真実を多くの人に伝え、平和な、核兵器のない世界を実現できるよう願っています。

書籍紹介　**「天よりの声―ヒロシマ・被爆二年目の手記」**

（日本YMCA同盟出版部）

広島YMCAの会員たちによって編纂された、日本で最初の日本人による原爆体験手記である。孤児となった子どもや学生、保育士、看護師、教師、兵士、父、母など、立場の異なる16人の体験が収められている。

「地獄の絵巻物のような中を、泣きながら走った」という小学生。原爆症で苦しみながら亡くなった生徒や家族について書いた校長。炎の中、我が子を救えなかった父の告白――。原爆の恐怖が目の前に迫ってくるような、生々しい手記が並ぶ。

この本は、単に悲劇を再現して抗議しようとしたのではない。「天よりの声」という書名のとおり、平和への熱願をこめたものだったが、あまりの衝撃的内容にGHQから出版を止められ、1949年にやっと日の目を見たのだという。しかし市民らは、出版と同時にこれを奪うように買い求め、「霊前に供え、死者の冥福を祈った」と記録されている。

それから34年後、1983年に改訂版が出された。改訂にあたって、当時の広島YMCA相原和光総主事はあとがきで、次のように書いている。

「世界は原爆のすさまじい破壊力におののき反省しているであろうか？ しかも核爆発の恐ろしさを知らない若い層が増えている。（中略）政府や国家権力では、今日のこの切迫する核戦争の危機を押しとどめることはできない。できるのは、私たち市民であり、草の根の人間です。今、立ち上がらなければ取返しがつかない。世界の友と手を取り合って、それぞれの自国政府の政策を改めさせよう。私たちの子ども、家族、親しい友の生命を守ろう。どうか、この一冊を一人でも多くの方に普及してください」

戦後80年。YMCAの先達が残した、血のしたたるような思いをあらためて見つめる年としたく、下記に改訂版のPDFデータを公開しました。コピーのご希望などは、日本YMCA同盟までお問合せください。

https://www.ymcajapan.org/books_hiroshima-note/